



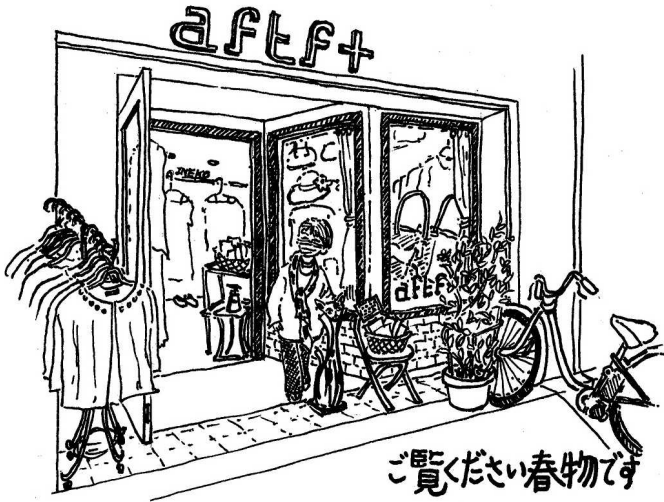
2021年4月15日発行（季刊）



う 羽 化 か

ISSN1880-8646
2021年4月
第121号

漢 点 字 羽 化 の 会
〒231-0063 横浜市中区花咲町1-46-1-1105 Tel 090-9003-7279
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
編集責任者 木 下 和 久



目 次

漢点字の散歩（58）（岡田健嗣）	1
点字から識字までの距離（114）（山内 薫）	12
わたくしごと（木村多恵子）	16
漢文のページ	23
ご報告とご案内	25
編集後記（木下和久）	27

漢点字の散歩（五十八）

岡田 健嗣



カナ文字は仮名文字（9）

不十分な理解のまま拙稿を書き始めましたのには、幾つかの理由があります。最も大きな理由は、何回かここに記しましたように、視覚障害者が使用できる文字に〈漢字〉がないために、子どものころからの視覚障害者には、〈漢字〉の教育が施されていないという現実があつて、子どもたちが成長したとき、〈漢字〉を習得しないまま社会で生きなければいけないという状況が生じてしまつております。このことは近代教育制度が始まつた明治期以来現在にまで続いている状況ですが、しかもそういう中であつて、視覚障害者の有識者と言われる先生方の、この状況を打開すべく抵抗を試みようという姿を、一度として見る事ができなかったのです。この視覚障害者の有識者と言われる先生方とは、やはり〈漢字〉の教育を受けて来られなかつた方々で、この状況を甘んじて受け入れて、周囲

に特定された視覚障害者と特定された晴眼者だけがいる場などで、「日本語の表記がカナモジだけでできるようであつたならどんなによかつたか、ご先祖様が恨めしい」などと言つておられるのを、よく耳にしたものでした。

このような「カナモジ」だけで書かれた文章とは、実際に存在しているものです。誠に惨めなものであつても、彼らが想定しているのは、現在視覚障害者が公式に使用している〈日本語点字〉を念頭に置いて言われるものです。明治期にこの〈日本語点字〉を採用することによつて、視覚障害者にも文字の世界が開かれたというのが彼らの言うところですが。このような「カナモジ」だけの表記に日本語の表記が合わせてくれないれば、視覚障害者の言語生活は、もっと心地よいものになつていたに違いない、しかし現状はそうはならなかつた、実に「恨めしい」と言うのが彼らの言い分です。言い換えれば彼らも、現状の「カナモジ」だけの〈日本語点字〉を使うことに、決して満足してはいるわけではないとも言えます。「恨めしい」というのですから、現状に対しては不満を持っているということ

のようですが、とは申ししても、その状況を破ろうというのではない、どうやらこれが現在の視覚障害者の置かれてある立ち位置と言つてよいようです。しかもこれは、受動的とばかりとは言えない、彼ら自身が選択した状況であるとも言えるのではないか、その辺りを考えて見たいと思います。

しかしながら一般には初等教育の中で、千字を超える「教育漢字」と呼ばれる漢字の習得が義務づけられております。学校教育制度の中で、子どもたちは否応なくそれだけの漢字の習得を求められます。学年が進めば辞書の使い方を覚えて、進んで漢字を学べるようになりませんが、それにしても相当の努力が求められます。

一方視覚障害者の子どもたちは、視覚に障害があるというだけでその義務を免除される、この表現は行政や教育機関が使用しているものですが、しかしその義務の免除とは、〈漢字〉の習得の機会が奪われるということと同義であることに、なぜかそこに関わる皆様、どなたも関心を持たれておりません。そういう中で視覚障害者の有識者の方が言う「ご先祖様が恨めし

い」という言葉が、密かに発せられます。

このように考えて参りますと、わが国も国語と呼ばれる日本語の表記を、「カナモジ」だけで表すことが可能か、あるいはそのような可能性があったか、そのようなことを考えて見たかったというのが、この拙稿の書き始めと言つてよいと思います。

春過ぎて夏来にけらし白妙の衣干すてふ天の香具山

『小倉百人一首』の二番目に置かれている持統天皇の御歌です。現在私たちが『百人一首』の御歌として読むことのできるものは、このような表記になっています。このような表記がいつ頃から行われているのか、浅学な私には見当が付きませんが、多分『小倉百人一首』を選したと言われる藤原定家の生きた平安末期・鎌倉初期には、表記法として定まった方式は成立していなかった可能性が高く、このような表記になっていたかどうか、あるいは別の表し方がなされていた可能性も充分あるように思われます。

何れにせよ右に掲げた持統天皇の御歌のような表記

法を、現在では「漢字仮名交じり文」と呼んでいます。その意味は、「漢字と仮名を交えて表記された文」というものです。しかし「漢字」と「仮名」を交えればこのような文ができるのかと言えば、そうではありません。そこには一つの方式があつて、一つのルールに則つて書かれる必要があります。私たち現代人は、教育制度の初等でそれを学んで、当然と受け止めています。

右の御歌は『万葉集』にある御歌、

春過ぎて 夏来るらし 白栲の

衣干したり 天の香具山 万二八

が原歌です。『百人一首』とは細部が少しだけ異なりますが、鎌倉時代は『万葉集』の時代から既に四百年を過ぎているのですから、この程度の違いは許容範囲、いや違いには当たらないと言つてもよいほどのものでしょう。しかし最初の『万葉集』にこのような表記で掲載されていた訳ではありません。

春過而 夏来良之 白妙能 衣乾 有 天之香来山

これが原文です。この『万葉集』の原文をいきなり突きつけられて直ぐに読めるだけの力は、私にはありません。しかしこれをいわゆる「漢字仮名交じり文」に変換した先の表記と比較してみれば、この原文は、比較的読み易い表記と言えます。この中でも際だつのが「而・良・之・能」の4文字、これを「て・ら・し・の」と読ませていることです。これらは助詞・送り仮名に当たります。また「春・過・夏・来・白・妙・衣・乾」は、それぞれ「はる・すぎ・なつ・きた・しろ・たへ・ころも・ほす」と漢字の訓読として読んでいること、また「有」は「たり」と読ませているようですので「訓仮名」なのでしょう。 「天之香来山」は奈良三山の一つ、訓読と音仮名・訓仮名で表された固有名詞と取つてよいと思われます。

この原文を見る限り、際だつて迫つて来るのが、〈漢字〉の訓読です。『万葉集』は「記・紀」と並ん

でわが国で最も古い文献です。言い換えればこれ以前には、文献と言われるものはなかった、あるいは現在まで残るものはありませんでした。しかしここで見るように、〈漢字〉がわが国に入ってきて来て、最初の文献であるこの表記に使用されているにも関わらず、〈漢字〉の読みとして、中国の音でなく、わが国の言語に対応した「訓読」が使用されていること、このことによつて『万葉集』の初期には既に、〈漢字〉の「訓読」がほぼ完成していたということが表明されており、その事実は驚きを持って再認識され、銘記されなければならぬと思われてなりません。かなりの長い時間、恐らく千年を超える時間をかけて、〈漢字〉をわが国の言語に合う文字とすべく試行錯誤が繰り返された結果が、この『万葉集』だったと言つても過言ではないのでしょうか。〈漢字〉の三要素である「形・音・義」を損ねることなく、日本の事物に合った読みである「訓読」を開発し、更にその文字で日本語の文章を表そうとしたのがこの『万葉集』だったのでした。

もう一首、柿本人麻呂の歌、

大汝 少御神の 作らしし

妹背の山を 見らくしよしも 万一二四七

「大汝」は「おほなむち」、「少御神」は「すくなみかみ」と読みます。この歌の意味は、「おほなむち、すくなみかみの作られた妹背の山は、見ても見ても素晴らしい景色だ」というものです。

この歌の原文は、

大穴道 少御神 作 妹勢能山 見吉

です。この歌は「略体表記」と呼ばれる表記法で書かれています。持統天皇の御歌でも同様ですが、漢字の使い方は訓読です。持統天皇の御歌では、その他助詞・助動詞・送り仮名が漢字の読みを、音仮名・訓仮名として使用して表されていますが、この人麻呂の歌では、助詞・助動詞・送り仮名はそっくり省略されています。

ます。このように現在では仮名文字で表記される文字を省略する表記法を、「略体表記」と呼びます。あくまで私の印象ですが、『万葉集』の時代の表記では、まだカナモジが〈漢字〉から分離しておらず、「漢字音」で読ませる方法が採られており、〈漢字〉で表記すべき部分と「カナモジ」で表記すべき部分を、一目で見分けることができませんでした。そこで人麻呂は、公的に発表する歌でない歌の表記を、このような「略体表記」で行ったのではなからうかと、そんな風に考えております。

もう一首、『万葉集』の「常陸相聞歌」から、

常陸なる 浪逆の海の 玉藻こそ

引けば絶えすれ あどか絶えせむ 万三三九七

作者は未詳、「浪逆」は「なさか」と読みます。歌の意味は、「常陸の国の浪逆の海で取れる玉藻は、引けば絶えてしまうだろうが、私の恋は絶えることはあ

りません。」というものです。「浪逆の海」について『萬葉集釋注』の注には、

浪逆の海：利根川の下流、茨城県鹿島郡北浦の南方、外浪逆浦（そとなさかうら）のあたり。常陸国府石岡への通路にあたる。

とあります。当時からよく知られた要地だったようです。

この歌の原文は、

比多知奈流 奈左可能宇美乃 多麻毛許曾 比氣婆
多延須礼 阿杼可多延世武

です。ご覧のように「春過ぎて」の歌とは様相が甚だしく異なっています。〈漢字〉に意味を求めない表記法と言えます。このような文字遣いの〈漢字〉は、いわゆる「万葉仮名」と呼ばれます。また、このように漢字音で音を表す「万葉仮名」を「音仮名」、訓読音

を仮名読みとする「万葉仮名」を「訓仮名」と呼びます。つまりこの歌は「音仮名」だけで表されている歌ということができません。従ってこの原文の「音仮名」は、現在の「カナモジ」に置き換えられることも可能です。更には言えば、私も日本人の遠い祖先は、現在の視覚障害者が「恨めしい」と言うのとは異なって、一つの試みとして、「カナモジ」だけの表記に挑戦していたということができませんが、後に「カナモジ」だけの表記という方法は採られなくなつて、ここに掲げた三首の歌も、やがて現在のように「漢字仮名交じり」で表されることになりました。

『万葉集』は、歌の部分は右の三首のように、漢字の訓読と音仮名・訓仮名による「漢字仮名交じり」、助詞・助動詞・送り仮名を省略した「略体表記」、音仮名だけで表記した「カナモジ表記」と、その表記法を大別することができます。また「題詞」と「左注」は、漢文で表記されています。すなわち日本語の表記が試みられているのは、歌の部分だけで、他は漢文で表記されてという編集です。

また歌の表記法によって、『万葉集』の成立時期を推測することができますと言われています。

同じ時期に成立している「記・紀」について申しますと、『古事記』の表記は、本文は読み下し漢文、すなわち漢文を日本語として読み下して漢字の訓読や音仮名・訓仮名を当てた表記で表されています。またそこにはしばしば古歌謡が挿入されておりますが、その歌謡は、全て「音仮名」で表記されております。すなわち漢字の訓読や訓仮名は使用されていません。

『日本書紀』の表記は、本文は漢文、古歌謡は『古事記』と同様、「音仮名」だけで表されております。

『古事記』の成立は和銅五（七一二年）、元明天皇に献上されるために編纂されたと言われます。そのためか、長く宮中の奥深くに留めおかれて、一般の目に触れることがなかったと言われます。『日本書紀』の成立は養老四（七二〇）年、わが国の国史として編纂されたものです。正式の国史として編纂されたことを示す意味でも、漢文で表されることが必要と考えられました。

一般に「万葉仮名」と呼ばれる「音仮名」が成立し、「カナモジ」の表記だけで『古事記』・『日本書紀』の古歌謡が表記されるに至って、やっと歌謡の表記の標準が「音仮名」であるとされることとなったようです。

翻って、『万葉集』の作歌年代を特定するのに、「音仮名」による「カナモジ」だけの表記となつてゐる歌は、『古事記』・『日本書紀』の成立と同時期、あるいはそれより後に作られたものだと考えてよいようです。『古事記』・『日本書紀』の成立以前と云えば、持統・文武朝のころで、最も活躍していた歌人はあの柿本人麻呂です。人麻呂の歌の表記は、「音仮名」だけではありません。文字を意味として捉えた表記法を採っています。そのような表記法が続くのは、持統・文武朝の宮廷歌人の流れ、大伴旅人・山上憶良・山部赤人等の流れが続くまでで、その後の歌人の歌は「音仮名」だけの表記が急速に主流となつて参りません。

日本語の文章の表記はこのように、中国から渡つて

きた〈漢字〉を、その文章とともに日本語に変換するところから始まりました。「訓読」の成立です。その〈漢字〉の「訓読」に歌謡を乗せて、文字として表記されたのが恐らく「和歌」の始まりだったのでしよう。『万葉集』を見る限り、題詞や左中によれば、かなり古い時代の歌とされるものもありますが、長歌も短歌も、その形式は極めて厳密に守られていて、形式だけ見れば、持統朝以降の歌と、異なるところはありません。このことは歌謡として口伝されて来たものそのまま文字に写したものと云うよりは、一旦文字化したものを更に推敲して、音数律を整えた結果にできた作品ではないかと考えてよいように思われます。このようにして〈漢字〉の訓読の成立が、〈漢字〉を日本語を表す文字となつたことを現したのだと云えると言つてよいと思われまます。

読み下し漢文で表されていると言われる『古事記』も、〈漢字〉の訓読なしには成立しません。その漢文の水脈が、もう一つのわが国の文章表記の大きな流れとなつております。

「漢文」の訓読は、正しく〈漢字〉を訓読し、そこに送り仮名と助詞・助動詞を挿入し、〈漢字〉を中国語の並びから日本語のものへと変更すべく指示符号を付けるという方法で行われました。これは現在も行われている方法ですが、ここでも「カナモジ」が大きな働きをしております。現在行われている漢文の訓読の

方式は、漢字の並ぶ行の右側にカタカナの送り仮名と助詞・助動詞を置き、行の左側に「返り点」と呼ばれる指示符号を置いて、漢字の読み順序を指示しております。このカタカナの送り仮名と助詞・助動詞と指示符号である「返り点」を合わせて「訓点」と呼びます。現在ではこのような操作も省略して、読み下してある、「訓点」のついていない文章を読むことで、漢文の古典を読むのが普通になっております。しかしつい先頃まで、一般の文章の中に、漢文の読み下し文と同様に、ひらがなではなく、カタカナが用いられた表記法が見られました。たとえば、朝日新聞令和3年2／06号掲載の、原武史氏著「歴史のダイヤグラム」に引用されている文章があります。「軍八陸海軍共二健

全ナリ、国民ノ後ニ続クヲ信ズ 宮中尉」（『吉沢久子、27歳の空襲日記』）。昭和20年の敗戦直後に東京に撒かれたビラの文章です。旧日本軍の軍人が、抗戦を呼びかけるために戦闘機から撒いたものと言われま

す。
現在私たちが読み書きしている日本語の文章は、繰り返しになりますが、「漢字仮名交じり文」と呼ばれる文章です。この形式が定まったのは、右に述べて参りましたように、決して古いものではありません。この「漢字仮名交じり文」がどのような形式か、お浸いをしてみたいと思います。

「漢字仮名交じり」と言うのは、文字通り〈漢字〉と「カナモジ」を交えて表された文章を言いますが、現在は「カナモジ」と書きましたのは誤りで、「かなもじ」と書くべきなのです。右にも述べましたように、少し前までは、〈漢字〉と「カナモジ」で表された「漢字仮名交じり文」も珍しいものではありませんでしたが、現在、第二次世界大戦後に、わが国の表記

法が、ほぼ一つに統一されたと言われます。つまり〈漢字〉と「ひらがな」を交える方式だけが採られることとなりました。どのように交えるか、小学校一年生の子どもたちに仮名遣いを教える際、子どもたちがよく行う間違いがあると言われます。「……しまし田」。〈漢字〉の勉強をしていて、「田」という文字を覚えたところで、今度は文章の勉強をします。子どもたちには、この「ひらがな」で書かなければいけないということが、大変理解し難いようで、このような書き方になるお子さんが結構おられるとお聞きします。しかしこここのところを理解している大人もどれほどおられるか、せいぜい経験則でクリアしているだけで、その理由まではなかなか分かってはいないのではないでしょうか。

右の『万葉集』の表記の中で触れましたが、『万葉集』の初期の歌の表記では、〈漢字〉の訓読と音仮名・訓仮名によって表されてきました。つまり当時の歌人は、日本語を文字で表そうとしますと、どうしても「仮名」でなければ表せない言葉のあることに気付い

たのでした。中国から渡って来た〈漢字〉で、わが国の事物について書き表すことを目指して「訓読」を開発したとは言え、これは〈漢字〉の「表意文字」としての特性を応用したもので、その他に日本語には事物を表す語に加えて、それらを繋ぐ語があったのです。

現在では品詞として「助詞」と「助動詞」に分類されていますが、語と語とを繋ぐ、あるいは文を結ぶ語としての働きを持つ語の存在です。また事物を表す語でも品詞によつては語尾の変化（活用）するものがあることが分かって来て、それも次の語へ繋ぐ働きをしています。そこで当時の歌人は、それらを「漢字音」を利用して表すことにしました。これが「音仮名」と「訓仮名」です。当時は文字と言えば中国渡来の〈漢字〉しかありませんでしたので、仮名も〈漢字〉で表すことになったのです。

この〈漢字〉で表記される部分と「仮名」で表記される部分については、国語辞典の『広辞苑』に、以下のように述べられています。〈漢字〉で表記される部分を「詞（シ）」、「仮名」で表記さ

れなければならぬ部分を「辞(ジ)」と呼んでい
ます。

詞 文法上、それ自身で或る一つの概念を表し、
思想内容を概念的・客体的に表現し、言語主体に対立
する客体を表す語。単独で文の成分を構成しうる。助
詞および助動詞(一説に、助詞・助動詞の大部分と陳
述副詞・接続詞・感動詞)を除いた他の品詞をいう。

辞 文法で、言語主体の客体に対する種々な態度
を表現し、詞と結合して初めて具体的な思想を表現す
る働きをもつ語。形式語・虚辞・付属語などと称せら
れる。助詞および助動詞(一説に、助詞・助動詞の大
部分と陳述副詞・接続詞・感動詞)をいう。

つまり品詞で言えば名詞・動詞・形容詞・副詞の語
幹に当たる部分を「詞」、助詞・助動詞と動詞や形容
詞の活用語尾を「辞」と呼ぶ、ということです。この
「詞」に当たるところは〈漢字〉で表記され、「辞」
は「かなもじ」で書かれなければなりません。仮名

は、伝統的に和歌を中心とした和文は「ひらがな」
で、読み下し漢文は「カタカナ」で書かれますが、現
在の「漢字仮名交じり文」では、〈漢字〉と「ひらが
な」を交えた文章が一般となりました。

そのために「カタカナ」は、従来の読み下し漢文の
仮名の表記を担うという役割から解放されて、現在で
は専ら、外国語を日本語として発音するときの、外来
語の表記に使用されるようになりました。従ってこの
「カタカナ」も、「辞」ではなく、「詞」を表す文字
となったことになります。更に言えば、現在の日本語
の文章の中には、どんな文字も挿入が可能で、実際
にアルファベットは、通常の表記として、やはり
「詞」として使用されています。「詞」は、少しやや
こしくなるのですが、〈漢字〉の代わりに「ひらが
な」を当ててもかまいません。文章に柔らかみが出る
とも言われて、むしろそういう表記が積極的に行われ
る傾向もあります。

しかしそのまま総仮名の表記が一般となるかと言え
ば、そのような気配はなさそうです。

『万葉集』の初期に編まれた部分は、〈漢字〉の訓読・音仮名・訓仮名と、現在のような仮名文字はまだなかったにしても、既に「漢字仮名交じり」を指向していました。後期の『万葉集』や「記・紀」の歌謡では、音仮名による仮名文字だけの表音で表記されました。その後平安期には現在に近い「かなもじ」が成立して、「仮名文学」が開花しました。

一方中国から渡って来た「漢文」は、わが国の学問や政治に深く根を下ろして、公式な文書は「漢文」で書かれることになって行きました。現在でも公式な文書は、読み下しの「漢文」です。ただ戦後は、「読み下し漢文」の調子の文章も、「カタカナ交じり」ではなく、「ひらがな」を交えた表記の文章になりました。

この平安期以来の和歌や物語の表記として用いられた「仮名文字」の文章と、公式の文書として使われ続けて来た「漢文」が、現在ではどちらも「漢字仮名交じり文」として、形式としては見分けの付かないほどに近づいております。ほとんど同じです。せいぜい筆者の個性の違いとしか認められないほどです。そして

文頭に掲げた三首の歌のように、現在では「仮名文字」だけで表されたものではなく、間違はなく「漢字仮名交じり」で表されるようになりました。一体これはどういうことか、「ご先祖様が恨めしい」と言う視覚障害者の声は、この辺りを指して言っているのではないかと思われてなりません。

『万葉集』の後半から平安時代を通して、「仮名文学」が花を開きました。そののち私どもにその文化が伝えられる間に、「仮名文学」の「ひらがな」で表記された「詞」の部分が、徐々に〈漢字〉に置き換えられて行つたと考えてよいでしょう。そして現在に至つて「漢字仮名交じり文」が成立することになりました。

その理由は、断言することはできませんが、言えることは、「ひらがな」だけで表された文章は、恐らく読み難かつたのではないのでしょうか？もう一つ読み難さに通底することとして、書かれた文書は何度でも読み返されること、著者も読み返しますし、読者も何度も読み返します。また印刷技術のなかつた当時は、「書写」だけが文書の流布の方法でした。読み難い文

章は「書写」もし難い、「書写」に当たった人々も、「書写」に叶った文字遣いを選択したのではなかったでしょうか。

また「概念」や「論理」を表すのには、「ひらがな」は大変不都合だったのではないか、もし「概念」や「論理」を「ひらがな」だけで表すとすれば、おそらくわが国の言語も、もっと入り組んで複雑な音韻の体系が求められることになったに違いありません。その前に、既に〈漢字〉の「訓読」が完成して、日本語の表記に〈漢字〉が受け入れられていることを思えば、「概念」や「論理」を表現する文字として、〈漢字〉に期待することは当然と言えます。

現在も、「ひらがな」だけで表記される文章の存在を、視覚障害者の有識者の先生方は、このような幻の文章の存在を、信じておられるのかもしれない。その先生方の口からは、残念ながら〈漢字〉の習得の必要性については、言及されることはありません。憂慮に耐えません。是非とも体系付けられた〈漢字〉の教育が、視覚障害者の子どもたちに施されることを望んで止みません。

点字から識字までの距離(一一四)

通所支援事業所へのサービス(四)

山内 薫

キッズサポートりまへの三回目の訪問

二〇一七年八月九日の夏休みにキッズサポートりまへの三回目の訪問を行った。参加者は七名で、前回参加してくれた全身性障害の高校生その他、やはり墨東養護学校に通っている男子中学生、小学校高学年の子どもが三人、低学年の子どもが二人だった。(写真一)

図書館側は私とひきふね図書館の職員が三人、そして今回も筑波大学大学院のKさんが来てくださった。

今回は午後二時からの一時間の予定で、前半がお話し会、後半は紙芝居やiPadを個々に見て貰うというプロ



写真1 お話し会の参加者

グラムにした。

お話し会ははじめの出し物は紙芝居の『おおきくおおきくおおきくなあれ』（まついのりこ／脚本・画童心社）。この紙芝居は幼児向けの観客参加型の紙芝居で、表紙には小さい豚の絵が描かれており、子どもたちと一緒に「おおきくおおきくおおきくなあれ」と唱えて紙芝居をめくると次の場面に大きな豚が現れるという仕掛けで、次に出てくるのは小さな卵。またみんな「おおきくおおきくおおきくなあれ」というと次の場面で卵が大きくなるが、卵にはひびが入っていて中から「ガオーン」という声が聞こえてくる。すると次の場面では卵が割れて中から怪物が出てくる。次は小さなケーキが画面の真ん中に描かれている。そこでまた、みんな「おおきくおおきくおおきくおおきくなあれ」と唱えるのだが、次の場面のケーキは画面の半分ほどしかなく、これではみんな食べられないといつて、もう一度みんな「おおきくおおきくおおきくおおきくなあれ」と言うと、画面一杯のケーキが現れるという八場面の紙芝居で図書館などでも子どもたちに好評である。図書館や高齢者施設でもこの紙芝居を何回も上

演しているが、その場合もう一つ仕掛けを用意している。紙芝居の最後の場面は画面一杯のケーキだが、子どもたちにもう一度「おおきくおおきくおおきくおおきくなあれ」と唱えてみようというのである。そして黒い幕の後ろから段ボールで作った横一メートル、縦八〇センチほどの巨大ケーキを登場させる。これはインパクトがあつてとても好評だが、図書館で上演するときのようには巨大ケーキを隠しておくところが「りま」にはないので、苦肉の策で紙芝居の後ろに折りたたんだケーキを置きそこに暗幕を被せて隠し、最後に暗幕を取り除いて折りたたんだ巨大ケーキを出すことにした。



写真2 紙芝居おおきくおおきくおおきくなあれ



写真3 巨大ケーキの出現

次はやはり写真による紙芝居『フォトかみしばい
かがくのアルバム アブラゼミ』（七尾純／構成・
文、あかね書房）を行った。丁度夏でもあり季節にち
なんだ紙芝居ということで見てもらった。（写真四）

次は行事用大型絵本の『せんたくかあちゃん』（さとうわきこ／さく・え 福音館書店）（写真五、六）。洗濯が大好きなあちゃん、お天気の良い日には、家中の物、猫も、犬



写真5 大型絵本せんたくかあちゃん



写真6 せんたくかあちゃん、雷が大量に落ちてくる



写真4 紙芝居アブラゼミ

も子どもまで、みんなたらいに放り込み、ジャブジャブ洗う。その洗濯物を庭と向かいの森の木という木に縄を張り全部干す。それを見た雷が干されている子ども達や動物のおへそを食べようと、空から落ちてくる。その薄汚れた雷を見たかあちゃんは、雷をたらいに放り込み、ゴシゴシ洗ってしまう。そのために顔が消えてしまい、雷の顔をペンで書いたところ、皆、美男子になって空に帰って行った。その翌日、空が俄にかき曇り、おびただしい数の雷が顔を書いて欲しいと落ちてくる。かあちゃんは「まかしときい！」と胸を張る。というあらすじでこの本も子どもに読む本の定番となっている。

続いて行事用大型絵本の『どうぶついろいろかくれんぼ』（いしかわ こうじ作 ポプラ社）。絵本のページに動物の輪郭の穴が空いており、ページをめくると輪郭の中に動物の顔や体が現れるという仕掛け絵本。子どもたちに動物の名前を当ててもらおうことができる。

全員で見てもらうお話し会はここまでで、その後個々に見てもらうことにする。私は『美女と野獣』の紙

芝居上・下（ポーモン著 藤田勝治構成／絵 童心社）を持って行った。丁度デイズニーの実写版『美女と野獣』が四月に封切られたばかりだったので、興味を持ってもらえると考えたのだがALSの高校生を含めて三人の子どもたちが見てくれた（写真七）。三人とも床に寝そべって上・下で二〇分近くかかる紙芝居を最後まで熱心に見てくれた。

同じ時間、中学生の男子と高学年の女の子はiPadに収納されている伊藤忠財団が制作したわいわい文庫の中のマルチメディアDAISY図書と一緒に見ていた。二人ともペローの『長ぐつをはいたネコ（ペロ―昔話）』（愛蔵版おはなしのろうそく3 東京子ども図書館 編訳、大社玲子 絵 東京子ども図書館）を熱心に見ていた。男子中学生は墨東養護学校で日頃からマルチメディアDAISY図書に触れており、最初に訪問し



写真7 紙芝居美女と野獣

た際に、やはり同じわいわい文庫の『ラプンツェル』を読んでいた子である。二人とも絵はほとんどない、およそ二〇分の作品を最後まで集中して読んでいた（写真八）。

別の場所では、車椅子に乗った子どもにりまの職員が『キャベツくん』（長 新太／文・絵 文研出版）を読んであげていた。

およそ一時間余の訪問中ALSの高校生は何度かいすの上に腹ばいになったり、布団に仰臥したり体位を変えていた。

『おおきくおおきくおおきくなあれ』などの観客参加型の作品や『どうぶついろいろかくれんぼ』のようなクイズ形式の作品を所々で挟むと、ずっと座って話を聞いているだけではなく、リラククスできるようなので、子どもたちとの応答ができる出し物をもう少し考える必要があると感じた。



写真8 長ぐつをはいたネコ
を読む

わたくしごと

30分ほどの巡り会い

木村 多恵子



わたしの高校二年は1960年にあたる。

ある方がICU（国際キリスト教大学）のチャペルでの礼拝に誘ってくださり、6月の日曜の朝三鷹駅の改札口で待ち合わせることにした。

その日は早くから大降りで、心配した母が浅草橋まで送ってくれ、さらに三鷹まで付いて行こうとした。わたしは三鷹まで一本で行ける電車に乗せてくれたら一人で大丈夫といった。傍でわたしたちの様子を見ていた女性が「わたし、この方とよく会うのでわたしの方はよく知っていますからお母さんは心配なさらないでください。わたしが一緒に乗ります」と言ってくれました。母は恐縮しきっていたが、丁度高尾行ききの電車が来たのでその方をお願いした。一緒に乗ってくだ

さった女性は余計なおしやべりはせず、傍で黙っていただく。やがてある駅に近づくと「わたしは今度の駅で降りますが、この先一人で大丈夫ですか？」と聞いてくださった。「はい、三鷹の改札口で友人たちが待っていてくださいますので」と言うとその方はそれでも不安になったのか、「あの、この方三鷹までいらっしゃるので、何方か三鷹まで乗られる方いらっしやいませんか？」と聞いてくださった。すると「八王子まで行きますから」と男性が言った。「わたしは高尾まで行きますから」という女性も声を上げた。わたしはよっぽど頼りない危なっかしい子供に見えたのだろう。乗る時世話をしてくださった女性は、いざ自分分が先に降りる段になって心配になったのは、きっといつも学校への往復のとき、彼（後の夫）が一緒なのを知っていたからであろう。

そのほか何人の方が声を上げてくださり、わたしは驚ろくばかりであった。「皆様ありがとうございます。では何方か女性の方お一人をお願いいたします」

と言うと、ざわざわお互いに、わたし！わたし！という気配を感じた。と、一人の女性が「じゃんけんです勝った人がお手伝いしましょう」とにこにこ笑顔で言った。みんな笑いながらじゃんけんが始まった。

最初は興奮して声高（こえだか）になっているのを「静かに」と合図する人もいたようで、少しずつ車内は静かにじゃんけんゲームが続いた。あいこが続き、だんだん一人抜け、二人抜けてゆき、またあいこが続いた。やがて一人が「勝ったあ！」

と声を上げ、「わたしがご一緒します」と言ってくださった。なんて素晴らしい人たちであろう。それぞれ単独行動で、友だち同士はいなかったようだ。いつもはぎゅうづめの中央線も、今日は雨の日曜日、空（す）いていてお気持ちにもゆとりができたのだろうか？ そうだ、最初じゃんけんが始まる時、何人か男性も入っていたようで、「今は女性だけでえーす」と言う仲間の声も聞こえ、車内に笑いもこぼれていた。

もしこの場に「隠れ蓑」を着ている母が居たら、涙

を一杯流さずにはいないだろう。「帰る時は電話をしなさいね」と何度も繰り返していた母の声も合わせてわたしの胸はきゅーんとなった。「面倒見係じゃんけん」が終わると皆様大人なので車内も静寂に戻った。わたしも静かに電車に揺られて行った。

次が三鷹というとき、「今度ですよ」と声をかけてくださり、改札口の仲間がいるところまで送ってくださった。とても自然なエスコートなので、待つて居た仲間は、その方もICUへ行くのだと思っただけだった。ほどだった。

三鷹駅からICU行きのバス停はとても近かったし、始発でバスもすぐ乗れたが、雨コートを通してさえ洋服はぐつしより濡れそぼってしまった。何方かが座席に座らせようとしてくださったとき「あのう、わたしこんなに濡れてるので立っています」と言った。恐らく終点までそんなに時間はかからないだろうと思っただし、わざわざコートを脱ぐのも面倒だったからである。が、運転手さんもほかの乗客の方たちも「その

「まま座りなさい」と言った。

ICUからお迎えに来てくださった女性も大きな傘を持ち、雨コートも着ていらしたが、まるで川の中を泳いでいらしたのではないかと思うほど濡れていらした。とても美しく上品なお声で、わたしは緊張の中にもうれしさが一杯になった。

（ICUの中を案内してくださったこの方のことをわたしは仮にAさんと言う）

Aさんは先ずわたしたち三人をICUに案内し、濡れねずみのように震るえているわたしたち三人が風邪を引かないように、係の方に暖房を入れるように頼んでくださった。

礼拝が始まるまでにはまだ少し時間があるようで、校内を案内してくださった。

わたしが驚いたのは三階建てのようだが、各階の中央位置にポストがあり、葉書と一定の大きさの封書はどの階から入れても全て一階にまとまり、郵便屋さんは一階の取り出し口から全部集めて持つて行ってくだ

さるのだという。

ふふっとAさんは笑いながら「今日のような雨の日は特に助かります」とおっしゃった。

「そろそろ礼拝が始まりますからチャペルへ行きましょう」と言っておっしゃるようだが、もうかなりの方が着席していらっしゃるようだがとても静かで厳かな静寂が漂っていた。

司会は多分アメリカの方であろう。

礼拝の順序通り、最初は英語で、次に日本語で賛美歌の番号も、聖書の朗読箇所も一人でなされた。説教も最初は英語でかなり永い永いセンテンスを述べ、次に和訳したものをおちよつとたどたどしい日本語で話してくださった。聖書の箇所はどこだっただろう。多分「汝の敵を愛せよ」というところであつただろう。説教は英語どころか日本語でもわたしには難しくて、何時のまにか学校のことなどへと思いは外れてしまった。

「讚美歌は英語、ドイツ語、フランス語、日本語、どれでも好きな言葉で歌ってください。」と言われ

た。やはりICUだわ！当然わたしは日本語で歌った。

『主の祈り』は子供の頃から教えられていたので、英語（発音はともかく）で唱和することができてうれしかった。

礼拝の最後の方で、報告とお勧めがあった。それは、「太平洋戦争で、日本軍はヨーロッパや東南アジアや、アメリカの捕虜に対して残虐非道な行為をして、多くの捕虜を殺したこと、この日本軍の犯した罪を謝罪する印として記念碑を建てることになりました。一人でも多くの方に沢山献金していただきたいです。」
「
というようなことだった。

そして礼拝の最後は、今日初めてこの礼拝に来た人の紹介で、他の二人と一緒にわたしも紹介された。

礼拝が終わると、目の見えない高校生ということで何人かの方が「よくいらっしやいました」と声をかけてくださいました。

わたしには「さらなる献金依頼」の主旨がよくわか

らなかつたが、あちこちで献金の用意をしていらつしやる様子が分かり、わたしも少しばかりさせていた

いた。
するとその係の方が「斎藤先生が喜ばれますよ。先生に会っていきませんか？ご紹介します」と言う。わたしはちよつと慌てた。三鷹から一緒に来た人たちはすぐ帰るだろう。「あのう、わたしと一緒に来た人たちに三鷹で浅草橋へ行く電車に乗せていただくことになつてい

「じゃあわたしがあなたを三鷹で浅草橋へ行く電車にお乗せすればいいのですよ？」。「あ、あ、あ、あ、はい」とわたしは恐縮しながらもそう言つてしまつた。「すぐお仲間の方に伝えてきます」と言つてから先生に紹介すると言つてくださいました方に「ここでこの方と一緒に待つててくださいすぐ戻ります。」と言

い、Aさんはほんとにすぐ戻つていらして3人でエレヴェーターでどの階かは知らないけれどある一室に案内された。
「斎藤先生、今日初めて礼拝に来てくださり、募金して

「おお、ありがとう。よく来てくださいましたね。」
と、と齋藤先生が仰有りもう面会許可も取っていたようである。

「学生さんでしょうか？何年生？」

「高校二年です。東京の盲学校に行っています。視力は0です。明暗ありません」

「そうですね。では並んで座りましょう。その方がよくお話もできるから」とおっしゃり、先生の大きなテーブルで、先生の左隣に座らせていただいた。

「今日の報告と献金のお願いの内容は初めてお聞きし、よく分からないのです」とわたしはおどおどしながら言った。

「そうですね。お若い、あなたたちくらいの方は知らないでしょうね。日本の軍隊は戦争中沢山の国の兵隊さんを拷問にかけたり、食べるものもちゃんとあげなかったり、沢山悪いことをしたんです。日本人はそういう人たちにお詫びをしなければなりません。

わたしたちキリスト者は、まず神様に赦しを請い、実際に日本が殺してしまった沢山の国の人たちにお詫び

をしなければなりません。どういう形で謝罪の意を表すかはまだ具体的には決まっていますが、まずなんにしてもお金が必要なので、仲間で始めたばかりです。一人一人は少なくとも重ねていけばいいかは良い方法がみつかるでしょう。」

齋藤先生は日本軍人が犯した具体的な惨劇に付いてはお話にならなかったが、「ちゃんと食べ物あげなかったり寒さや暑さにたいしても何もなかったのです」というのを聞いただけでもわたしは涙ぐんでしまった。

Aさんが、「先生は連合軍の体験談を、アメリカのステイブ・ヤングという人が書いているのを日本語に訳していらっしゃるのですよ」と教えてくださった。

「いやいやわたしのはまだ訳し終えていませんが、菅野和憲さんが訳したのもあるよ」と言われ、わたしは「それならもう読めるのですか？点字でも読めますか？」と短兵急に言ってしまった。「さあ、点字は分からないけれど本はできている」と言われたので、

著者名とタイトルをメモさせていただいた。

「今日あなたがしてくださった献金はね、まだ始めたばかり、ほら、ここにお金が入っている。カンを振って音を聞かせてあげますね。」

「ここから入れるのですね？」

直径14、5センチ、深さ5、6センチのカンで、上にお金を入れられるように穴が開けてある。「貯金箱みたい！」

わたしはお財布を出し、「飯田橋まではいくらかしら？」と小声で言った。先生は「うん？」と不思議そうに言いわたしはいい加減に百円玉を二つほどポケットに入れて財布を空にした。

「種銭の一部になるかしら？」

「おお、種銭、立派な種銭です。」と先生はにこやかな声で言われた。

わたしはほんの少しだけけど母からもらってきた交通費とお弁当代、それにわずかしかなのお小遣いをカインに入れさせて戴き爽やかな喜びを感じた。

そして立ち上がり丁寧におじぎをした。先生の大切

なお時間をもう30分は戴いたのであろう。

「これから『失楽園』の原文をみんなで読みますから出てみませんか？」などととんでもないお誘いを戴いたが、原文など読むことも聞くこともできない。

「創世記読んでいるでしょ？難しくなんかありませんよ」

さすがにこれは失礼させて戴いた。

丁度そこへ先生のご同僚らしい方がお部屋へいらして、「学生さんに逃げられました」と磊落にお笑いになった。「この人、帰りの切符代だけ除いて財布を空にしてくれました。ああ、それで大丈夫なの？」

「はい、飯田橋まで買えば後は定期があつて電車も都電も大丈夫です。ありがとうございました」

その後教えていただいた本を探し、苦勞の末見つけて読み始めてわたしはあまりの酷い日本軍の仕打ちに「うそでしょう？信じられない、信じたくない」と思った。もしあのとき先生がこの現実の話をしてくださったらわたしは震え上がっただろう。

その後「黒いクリスマス」そのほか恐ろしいことを

知るたびに先生が「知って欲しい」と言われた意味が分かってきた。

ステイブ・ヤング著、斎藤和明訳

『死の谷を過ぎて』や、アーネスト・ゴードン著『クワイ川収容所』などを読み、そうして「羽化118号に書かせていただいた横浜の保土ヶ谷の「英連邦戦没捕虜追悼礼拝」に巡り会ったのである。

わたしはこの連合軍の墓地がどのような道を通って作られたのか知りたくて第25回目の追悼礼拝の折に、わたしなりの「謝罪と赦しの礼拝」に初めて行ったとき資料を買ってきた。その本を点字で読みたたくて「希望点訳」を約一年待った。読ませていただいたときの驚きをどう言い表したらよいか分からない。

わたしがお目にかかれた斎藤先生は、この墓地での追悼礼拝発起人の3人のうちのおひとりであった。先生のプロフィールを読んで間違いなくあの時の斎藤先生のことであった。

毎年8月第一土曜の11時に追悼礼拝は行われて、今

年(2021年)8月7日は27回目になる。

第1回は戦後50年に当たる1995年だという。

わたしが先生にお会いしたのはそれより25年も前であったが、先生方は辛抱強く粘り強く多くの国、人々との「和解」を目指してのお働きはどんなに心血を注がれたのであろう。

あのソフトで温かく明るいお声が今もわたしの耳に残っている。

「この追悼礼拝は百年も二百年も三百年も続けること」と会員の方々は熱い思いで伝えて行くだろう。

斎藤先生は2008年に亡くなられているが、「平和の尊さ」を教えてください。大切な方である。

わたしが小学生の時、横須賀の米軍キャンプの病院であった負傷をされたアメリカの方もわたしにそれを教えてください。大切な人である。

わたしはこれから何回保土ヶ谷の追悼礼拝に行けるだろう。斎藤先生からの大きな大切な伝言である。

2021年4月15日(木)

漢文のペリジ

孔子の弟子たら 宰我(宰予)

三年の喪は長すぎる？

宰我問、三年之喪、期已久矣。

君子三年不爲禮、禮必壞。三年

不爲樂、樂必崩。舊穀既沒、新穀

既升。鑽燧改火。期可已矣。

子曰、食二夫稻、衣二夫錦、於女安

乎。曰、安。女安則爲之。夫君

子之居喪、食レ旨不レ甘、聞レ樂不レ

樂、居處不レ安。故不レ爲也。今女安

則爲之。宰我出。子曰、予之不仁

也、子生三年、然後免ニ於父母之懷。

夫三年之喪、天下之通喪也。予也

有ニ三年之愛於其父母乎。

宰我問う、三年の喪は、期已久し。君子

三年禮を爲さずんば、禮必ず壞れん。三年樂

を爲さずんば、樂必ず崩れん。舊穀既に沒

き、新穀既に升る。燧を鑽りて火を改む。期

にして可ならんのみ。

子曰く、夫の稻を食い、夫の錦を衣て、女

に於て安きか。曰く、安しと。女安くば則ち

之を爲せよ。夫れ君子の喪に居るや、旨きを

食えども甘からず、樂を聞けども樂しから

ず、居處安んぜず。故に爲さざるなり。今、

女安くば則ち之を爲せよと。

宰我出ず。子曰く、予の不仁なるや、子生れ

て三年、然る後に父母の懷を免る。夫れ

三年の喪は、天下の通喪なり。予や三年の愛

其の父母に有るか。(『論語』陽貨第十七)

*読み下し文は、現代仮名遣いにしました。

幸我問フ、三年之喪ハ、期已
 ダ久シ矣。君子三年不ンバ爲
 サ禮ヲ、禮必ズ壞レン。
 三年不ンバ爲サ樂ヲ、樂
 必ズ崩レン。舊穀既ニ没キ、
 新穀既ニ升ル。鑽リテ燧ヲ
 改ム火ヲ。期ニシテ可ナランノミ已
 矣。

上記点訳は初めの部分（幸我の問い）。⋯⋯はレ点（返り点）

期已（はなは）だ久し＝いかにも長すぎる。期は時期・期間。
 期にして可ならんのみ＝1年でよいのではないか。期は期年（満1年）
 の意。三年の喪は満3年でなく25か月。

（喪中は粥をすすり粗末な喪服を着て仮住まいの禁欲的な生活を送る）

三年もの間喪に服して、礼や樂を修めずには礼も樂もすたれる。
 古い穀物は尽きて一年たてば新たに実り、季節ごとに異なる火おこし
 の木も一巡して元にもどる。一年一週が天道の常であるから、父母の
 喪も一年で十分なのではないか、と問う幸我。

孔子 一年喪に服しただけで、あの米を食い、錦を着る生活に戻って平気なのか？

幸我 平気です。

孔子 君子は、喪中は何を食べてもうまくないし
 音楽を聞いても楽しめないものだが、
 一年で平気というなら、そうしたらよかろう。

幸我、退出する。

孔子 子供は生まれて三年の間は父母の懐ふところに
 抱かれて育つものというので、三年の喪
 が定められたのだが、宰予はその愛情を
 受けなかったのだろか。（ためいき）



参照図書：諸橋轍次『論語の講義』大修館書店



一 本号・機関誌『うか』一二二号の発行について
本誌・機関誌『うか』は、昨年（二〇二〇年）には一月に一一九号、一〇月に一二〇号を発行しました。季刊の発行の予定が、このように間遠なものになりましたのも、他でもありません、新型コロナウイルス・ウィルス、COVID-19のパンデミックが生じて、世の中の活動が著しく制限されたために、本誌の印刷や製本が叶わなくなつたためです。また本誌も、計画では今年一月には発行したいと考えておりましたが、今月になつて作業ができる見通しが立ちまして、やっと発行できる運びとなりました。発行に当たつて下さる会員の皆様には、心より御礼申し上げます。

二 賛助会費のご納入、深く御礼申し上げます

二〇二〇年度の賛助会費のご納入、誠にありがとうございます。有効に使わせていただきます。

ご納入下さいました皆様の「ご芳名は、左の通りです。

雨宮絢子様、 坂口喜代様、 田崎吾郎様、
馬場威力様、 岡稻子様、 武田幸太郎様、
村田忠禧様、 河村美智子様、 政井宗夫様、
関口常正様、 木原純子様、
心より御礼申し上げます。

三 『萬葉集釋注』第九卷・漢点字版

『萬葉集釋注』第九卷（伊藤博著、集英社文庫）の漢点字版が完成しました。そして、二〇二〇年度分として、横浜市中央図書館に納入しました。

同書全一〇巻の漢点字版を順次製作して、中央図書館に納入して参りましたが、二〇二〇年度はその第九巻となりました。

第九巻には、『萬葉集』の巻第十七と巻第十八が収められています。巻頭の一〇首の歌についての伊藤先生の「釈文」から、その頭の部分を引いてみます。

巻十七から巻二十までの、『万葉集』末尾の四巻は、筆者のいう「十五卷本万葉集」（巻一〜十五に付録「由縁有「ゆゑよしあ」る雑歌「さふか」」を添え

たもの)を、「由縁有る雑歌」を卷十六として独立させつつ十六卷に仕立てたのちに、大伴家持手許の歌日誌を四卷に分けて十六卷のうしろに合わせることで成立したものと推定される。すなわち、『万葉集』二十卷は、卷一〜十六が第一部、卷十七〜二十が第二部としてまとまりを見せ、大きくは二部構造になっているわけである。この場合、右に掲げた冒頭歌群から三九二一までの三二首は、第一部に収めるべくして洩れた歌を、第一部と第二部との繋ぎとして補ったものと思われる。それが証拠に、三二二首は、天平二年(七三〇)、天平十年、天平十二年、天平十三年、天平十六年と、歌が飛び飛びに配列されているのに対し、そのあとは、天平十八年以降、一年の切れ目もなく続いている。

この三二首が、どこにどのようなようにして洩れていたかはよくわからない。ただ、そこには、第一部では四首の歌しか登録されていない、家持の弟の書持(「ふみもち」)の歌が、八首もある。このことから、三二首は、大伴書持の手許に蔵されたまま、その死後発見されてここに収録されるに至ったのではないかと推測される。

る。書持が他界したのは、天平十八年の九月初旬頃。兄家持が越中国守に赴任して二か月後のことであった(三九五七〜九参照)。家持は、その後帰京して、いつの日か、弟書持の手許の三二首を発見し、心中記念するところもあって、第二部の冒頭にこの三二首を掲げたのではないかと思われる。(後略)

なおこの漢点字版は、横浜市中央図書館に所蔵されて、全国の図書館を通して貸し出されます。大いにご利用下さい。

四 本会の製作して参りました漢点字書の

電子データについて

既にご報告申し上げましたように、本会の製作して参りました、あるいはこれから製作して参ります漢点字書の電子データを、テキストデータと漢点字用のデータ、並びにBMTのデータとしてご提供致します。また現在同データを横浜市中央図書館にご提供すべく、同館にご提案申し上げてもおります。

漢点字書とともに、ご利用をお待ち申し上げます。

編集後記

▼この1年あまり、世の中は全く見通しの立たない状態です。昨年10月に第120号を発行してから半年たち、何とか今号を発行できることになりましたが、次号が無事予定どおりに発行できるかどうかは分かりません▼「案内」欄にありますように、『萬葉集釋注』第九巻・漢点字版が完成し、横浜市中央図書館に納入しました。この第九巻は11分冊で、その製本作業は(有)横浜トランスファ様のご厚意により、研修室を作業の場として利用させていただきました。十分な広さがあり、「密」になることなく安心して作業を行うことが出来ました。この場をお借りしてお礼申し上げます▼この書籍には地図を主体とした図版が含まれており、これを触読可能にするために従来は立体コピー機を利用していましたが、一昨年立体プリンターを購入しました。発泡紙に熱を加えて線を浮き立たせるものですが、非常に鮮明な画像を浮き出させることが出来ます。視覚障害者に点字のみならず、図形が触読出来るよい手段が出来たものと思います。

木下 和久

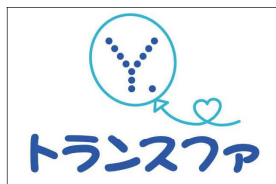
(有) 横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー2級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。

研修者募集：弊社では、ガイドヘルパー（視覚障害者）の資格取得研修を実施致します。詳細はホームページで。



URL: www.ytrans.net

〒231-0063横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1105

電話: 045-263-0306

FAX: 045-263-0316

E-MAIL (岡田健嗣) : okada_tr_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://www.ukanokai-web.jp/>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は2021年7月15日です。

※本誌(活字版・DAISY版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。